

クラシックと張り合える

09年6月のジャパンツアーの感想は、どんなものでしたか？

俺の子供の頃からの夢は、有名なロックバンドでギターを弾いて、世界中をツアーするというものだったんだ。その夢がかなった気分だった。本当に嬉しいよ。日本公演はミスター・ビッグの復活ツアーということで、すごくスペシャルなものだった。正直、まさか実現するとは思ってなかったんだ。エリック、ビリー、パットとまた友達になれたこともすごく嬉しかった。久々に大きな会場でショーをやったのも特別な経験だったな。ソロでやる時はクラブや小さな会場だけど、ミスター・ビッグだと武道館や横浜アリーナでプレイすることが出来るからね。これだけ大きな会場で観客全員に音楽のエモーションを伝えるのには、すごいエネルギーを要するんだ。大きなチャレンジだったけど、3人のおかげで何とかだった。

来日公演の後、ヨーロッパとアジアのツアーを行いました反応はどうでしたか？

最高だったよ。インドネシアとインドでのショーは、ツアー中でも最大級のものだった。ヨーロッパでのショーも暖かい反響があった。ミスター・ビッグが最後にヨーロッパでライブをやったのは「パンプ・アヘッド」ツアーだから、ファンはみんな俺たちが戻ってきたことを喜んでくれた。

新作スタジオ・アルバムを作るというアイデアはいつまとまったのですか？

ジャパンツアーの時点で、アルバムを作ろうと考えていましたか？

ツアーをやっている時は、とにかく毎晩ベストなプレイを聴かせて、自分たちも楽しむことしか考えていなかった。あまり先のことを考えると、頭の中がいっぱ

いっぱいになってしまうからね。ひたすら歌って、プレイして、ロックすることだけを考えてたんだ。誰がいつ、アルバムを作ろうと言い出したのか覚えてないけど、すぐに話がまとまったよ。とにかくツアーが楽しかったし、みんなで新しい曲を作りたい気分だったんだ。

あなたにとって『ホワット・イフ…』は96年の『ハイ・マン』以来、ミスター・ビッグのメンバーとして作る14年ぶりのアルバムですが、ソロキャリアやレーサーXで活動して、どんなことを学びましたか？

自分が1年間に学んだことを挙げていったら1冊の本になってしまうから、14年間に学んだこととなると百科事典ぐらいの分厚さになるだろうな！音楽について学ぶのは2種類のやり方があるんだ。まずひとつは、他のミュージシャンとジャムを行って、彼らと“対話”することで、本能的にさまざまなことを習得していく。俺がギターを教えるときも、生徒とジャムをすることで何かを得ても

らおうとしているよ。「フレーズを盗む」とかではなくて、一緒にプレイすることで、自分の中からインスピレーションが湧き出るんだ。もうひとつは、クラシック音楽や音楽理論を研究したり、“勉強”に近いやり方で音楽を学ぶことだ。このやり方も役立つけど、あくまで初期段階であって、やはり俺はジャムを通じて学ぶことが多いね。とにかく14年のあいだ、俺はバンドや生徒、世界各地のミュージシャンと共演して、さまざまなことを学んできた。音楽のスタイルの幅も広がったし、ミュージシャンとして自信が増したと思う。ミスター・ビッグの多様な音楽スタイルに、自分のギターで再び貢献することが出来るてすごく嬉しいよ。

ミスター・ビッグの再結成アルバムとなると、世界中のファンから大きな期待がかかりますが、プレッシャーはありましたか？

次のツアーで最高にエキサイティングな気分になれるような新曲を書かねば！というプレッシャーはあったね。初期のアルバムの曲は大好きだし、演奏するのは楽しいけど、それと同じくらい楽しめる曲を書きたかったんだ。昔のクラシックと張り合えるぐらいの、最高の曲をね。「アンダートゥ」や「アラウンド・ザ・ワールド」、それから他の曲をライ

の高さをキープ出来るよう助けてくれたのさ。

ケヴィンがプロデュースしたアルバムで、あなたが最も気に入っているものは？

最初に頭に浮かぶのはブラック・クロウズの『バイ・ユア・サイド』かな。初めて聴いたその瞬間から気に入ったよ。それ以来何度も繰り返し聴いてる。

アルバムの曲はバンド全員で書いたとクレジットされていますが、あなたが書いた曲はどれでしょうか？

「アイ・ゲット・ザ・フィーリング」は大昔、ミスター・ビッグ用に書いたリフを引っ張り出してきて、曲の形に完成させたんだ。デモを録るのに一晩中かかって、朝7時になって出来上がった。その日のスタジオ作業がキツかったよ！それから「アズ・ファー・アズ・アイ・キャン・シー」のオープニング・リフ

PAUL GILBERT

INTERVIEW

このアルバムを作るときに
ロックしたい気分だったことは確かだね！

ブで演奏するのが待ち遠しいよ。最高にロックする曲だから、みんなも楽しみにして欲しい！

プロデューサーのケヴィン・シャーリーとの作業はどのようなものでしたか？

ケヴィンは俺たちにスタジオでライブと同じようにプレイすることを求めていたよ。ひとつの部屋で全員が同時にレコーディングすることで、密接な雰囲気を出すことが出来たんだ。ケヴィンは「ミスをやらかしても気にしないで、とにかくロックして楽しもう」と言ってくれたよ。彼のやり方は俺にピッタリだったね。どの曲も書いたばかりだし、まだ馴染みがないから、1日の初めにはまず曲の構成やアレンジとどんな感じでプレイするかを話し合っ、それからリハーサルに入った。でも午後になると、細かいことはどうでもいいから、とにかくすべてを忘れてロックしようぜ！ってなっていた。ケヴィンは常に俺たちのテンション

